

# ストライキ運動とその理論的対決を 更に実化させ移転阻止へ向けて 斗争の意を結集を

社会学の斗争全学反諸君／われわれは學部自治公は六月二十五日正館封鎖バリケードストライキ以來、六月二十九日には教育大官僚的权力機能の中枢である本館封鎖を勝ちとて、現在まで夏休みという困難な状況を斗う意志のもと連日連日のピケ、ペトロールを行い七十日以上にわたるストライキ斗

争を斗い抜いてきた。しかしながら、移転推進派、大學上戸部は、この両者々に移転実現化の家譜をおし進め、他方においては、われわれの斗争への適応痛めつけを強化してきた。このような推進派、大學上戸部の動きに対し、われわれは各クラス毎に早急に斗争体制を再構築し、移転阻止へ向けに新たなる斗争の展開を切り開き、學校校力と対決していかなければならぬ。また、本館封鎖解除を唱え右翼的結果区討うとしてくる一評議會の疑惑をも同時に粉碎しといかなくてはならない。

## △調査費文部省へ提出する

ストライク以来のわれわれの斗争は、六月二十九日に行われた教育大の文部省への撤軍請求の中に調査費を含ませることを阻止した。しかし、その後M戸春区中心に推進派は、調査費計上を行った。二〇の調査公決起承認が可決されるや否や、M戸春は、三十日の評議会で最終的な調査費に関する報告を行つた。評議會はこれを承認し、文部省へ提出した。二十九日再度の評議会で、事務局長が文部省との交渉について報告し、調査費計上の作業は全て完了し、あとは文部省で承認されるのを待つだけになった。

昨年の調査費計上がその内容のズサンへと理由に文部省によつてけられたが、しかし今度の計上はマスクトアランの作成によって形式的にも風波に絡まざることを前提としているものであり、文部省によつてこのらしさという可能性は少ないと文部省によつて

まで筋皮移転実現化の速度は加速度的になつてきている。しかしもはや文教授会は無視され切り捨てる一つある。このようす移転推進委員会を逆転させた力はもはやわれわれの斗いのうちにしか存在しないのだ。

## 〔斗争への彈圧機関〕本館封鎖対策特別委員会を粉碎せよ！

大學当局は、移転推進をはかる一方、他方では、われわれの夏休みをも返上して続いているストライキ斗争に対する彈圧を高度化してきている。即ち、運を繋し、沈黙を守つてきた三輪光雄學長の第一声は頭であるのか。それは八月十日、保護者へ直接学生へはなない、兎への文書といつ卑劣な手段をもつて行かれ、そこにおいて、文教授会に対する一方的非難・そして、ストライキ斗争を粉砕として現象主義的歪曲し学生の斗争を保護者の手を通じて説得（弾圧）しようとしている。そしてさらに、國家権力による学生運動の弾圧の立法化「大學特別法」制定の面石としての參院文教委の教育大規察の動きがある。（八月二十四日に予定されていたが學校当局の要請により延期された）この間學校当局は、斗争の自然発達あるのは、文教授会による説得に期待していだが、夏休み後半を過ぎてもスト体制が堅持されているのをみて、自らその收拾（弾圧）に乗り出した。二十九日評議会における「本館封鎖対策特別委員会（學長・各學部長・種種委員長・事務局長）」の設置決定は、今まで文教授会へまかせていた斗争の強引な收拾策を新たに機関を作ることにより大學当局が直接に手を下すこと尽可能にし萩原の集中をはかつたものである。これにさり學校当局によるスト斗争弾圧体制が既に確立されたのである。われわれは同斗争の底堅さ再度明らかにしたあらゆる彈圧を徹底して廃止せんことを斗争のうちにしなければならぬ。

# 社会学の全学友は9.10 社会学総決起集会に立ちパトスをもって結集せよ！

## 《斗争スケジュール》

- 9月9日 文部斗争委員会総決起集会  
(本館前芝生, 2時~)
- 10日 社会学総決起集会  
(G402, 1時~)
- 11(火) ↑ 11~15日は連続的大集会を行つ。
- 12(水)
- 13(木) 全学集会  
(本館前芝生, 2時~)
- 14(金) ↓ この期間に総括の徹底と斗争体制の再構築
- 15(土) ↓ 斗争委員会の結成が開幕する第一歩となるだろう。

## 《ピケ・警備ローテーション》

D班 - 社会学・経済・史方・言語  
※警備は 10時~翌朝8時 (2~6階裏卓)

8:00~10:00	11(火)	16(日)	21(火)	26(水)
10:00~1:00	10(火)	15(日)	20(火)	25(水)
1:00~3:00	9(月)	14(火)	19(木)	24(火)
3:00~5:00	8(日)	13(金)	18(木)	23(火)
5:00~10:00	7(土)	12(木)	17(火)	22(日)

総括を組織的に展開する中から、筑波を根柢的に抱えがおし、筑波斗争に対する全面的視点を確立することから出発しよう。

社会学は、スト突入以来文部斗争委員会の中にあつてつねに先頭に立つて斗争してきた。そして夏休み中も泊り込み30~5名、警備6~10名・ビケ5~10名を確保し斗い抜いてきた。しかし今がらの年に入り登校数は10名を越えてきててもかかわらず、泊り込みの減少等に冠される始々との内部的弱体化が露呈してきてる。このことはとりも子おなずか、社会学の一人一人の筑波に対する対決の問題として総括されなければならない。さればこの商の斗争を各自がどのようなく問題意識をもつて行つてきたのかという次元から自らの行動と斗争との連関を抱えながらしていくことだよつてしか可能とならない。

そして、その作業を社会学クラスとして組織的、大衆的に行う中から初めて、新たなる斗争体制の構築ができるのだということを社会学クラスの学生が確認することが必要なのだ。学校当局・移転推進派は八月下旬、調査費計上を決定し文部省へ提出した。そして本館封鎖対策特別委員会の設置を初めとして就私・選挙金問題を巧妙に利用して斗争の抑圧・弾圧を強化してきている。もはややりわけは本部の諸君が言つてゐるような「ルール」の問題「民生主義的か否か」という次元では現実の筑波問題に対応できまい状況におかれりることははつきりと自覺しなければならぬ。現時既におりとわれわれは、筑波との全面的な対決を迫られてゐるのだ。そしてこれがからの斗争は、学校権力との対決であり、筑波移転阻止へ向けての妥協なき斗争しかるい状況にあることを考えてみなければならぬ。それは、本館封鎖死守の斗争であり、試験阻止の斗争である。

## △社会学斗争委員会を組織的に再編成しそう△

前にも述べたように、現実の筑波情勢の急進化の中であつて社会学クラスの組織的対応の弱さ、理論的武装の立ち遅れ、総括の不徹化が存在している。このふたつの問題は、社会学における斗争体制・指導体制に大きな欠陥があつたことである。すなはち各学年が斗争委員会に出でていながら、それが社会学として有機的連携性をもちえず分散化傾向にあった。各学年における斗争委員会を含む社会学の全体的横断的斗争委員会の結成が、筑波を根の第一歩となるだろう。

調査費計上白紙撤回！マスタープラン委員会粉碎！本館封鎖対策特別委員会粉碎！

評議会大衆団交実現！参院文教委视察阻止！6.10土地確保決定撤回！本館封鎖死守！  
全学斗争委員会を結成しよう！筑波移転阻止！社会学は最後まで斗うぞ！前期試験阻止！